

権三の死

秋田雨雀

人物

権三ごんざ

青年、小性こしやう

おさい

権三と共に歩む女。

第一の武士の声。

第二の武士の声。

老いたる僧

師匠。

稚わかき僧

学匠。

場所

大阪に近いある河の橋畔。

時

一七一七年（享保二年）七月十七日午後六時頃。

第一節

舞臺左手に老いたる銀杏樹、其陰影が舞臺全面を蓋いつくすようになってゐる。銀杏樹の灰白色な皮膚の蔭に赤い小さな御堂がのぞく。右手銀杏樹と対立した位置に長い、やや広い橋の袂が緑色の叢につつまれている。

橋際から左手に斜めに走る河には帆と帆柱が時々静かに動く。土堤はやや高く築かれて、其上に斑に柳が生え、其緑を通して広い内海の空が見える。櫓の音。不明確な盆唄の合唱。単調な鼓の音。太陽は黄昏の偏光を川の対岸に投げている。

老いたる僧（土堤の上に「稚き僧」と腰かけ、河の面を眺めている。顔の半面のみを見せる。年輩不明、黒衣、笠と杖を手に持つ）おれの僧衣が濡れているわ。お前の僧衣も濡れているじゃろうな！ 冷い河風が吹いて来る。（稚い僧を見る）風は南じゃな。大阪へ行く船には芝居見物の女子供が、舳の方へ出て扇をはげしく動かしている。扇の模様が見えぬので、ただ浮標の上

に動いている鷗に見えるわ。
稚き僧 御覧なされ踊子に犬が吠えています。踊子が逃げて行きます。そして犬が吠えるのをやめるとまた踊ります。

老いたる僧（稚き僧を見ずに）おれは長い旅をした、おれはおれの生涯の中に十度この河を渡った。十五度あの湖の周囲を歩いた。おれはお前の生れぬ先からこの国を旅をして歩いた。

稚き僧（河を見下しながら）この河の水は、でも、あの湖のように澄んでいません。あの湖の中には色々な魚が住んでいると山の人々が申して居りました。（首を無邪気に曲げて老僧を見る）

和尚、この河にも沢山の魚が居るのでしようか？

老いたる僧 うむ、沢山の魚がこの濁った水を楽しんでいるわ。あの潮の中では見られぬほど大きな魚が、またそれほど沢山な魚が泳いでいるわ。

稚き僧 では（疑わしげに）和尚さま、私の父が漁師だとある人のいうて居るのを聞きましたが、それはほんついで御座りましようか？

老いたる僧 然うかも知れぬわ。お前は腐った魚の臭気とする舟の中に眠っていた。漁師の息子と人の云うのは嘘ではなからう。ちようど小さな目高魚のような口をしていた。でもな、お前は舟の中で吸った呼吸より船の外で吸った呼吸の方が多いのだ。それでも、この国の人々は歴史を重んずるから左様なことをいうのじゃ。何でもないことだ。

稚き僧 いえ、私も何とも思はいはいたしません。

老いたる僧 踊子どもは目の蔭るのも知らぬように楽しげに、歌ったり跳ねたりしている。

（立ちあがり少し歩みながら）おお、あれを見たか、あの船は伊勢へゆくのじゃ。伊勢の港へゆくのは。

稚き僧 伊勢へ何にしにゆくのでしよう？

老いたる僧 （答えずに、河の面に目を送り）船の中の女は青い首を出して踊子の方をうらめしげに見て居る。船頭は茶の箱の間に女供をつみ込んで歌をうたいながら、楫を荒々しく動している。

稚き僧 河をのぼる船の女は、あれを見て笑って居ります、ちようど京の街の唐操を見るように。老いたる僧 あの女供は、伊勢へ行く女を見たおなじ目で曾根崎の心中を見るのじゃ。そして涙

を流すのじゃ。涙を流す真似をするのじゃ。

稚き僧 女供は伊勢へ何にしにゆくのでしよう？

老いたる僧 伊勢の港の青年供は、わかものども毎夜毎夜行燈の下に集るわ。二階からは白い首が覗くのだ。お前は伊勢の青年供は歌が上手だじょうずということをおぼれたの！

稚き僧 能よう存じて居ります。港の角々には赤い湯屋の旗が樹たつて居ります。湯屋の小店に大勢の青年が立って居りました、そして細い声で歌って居りました。私は、その時和尚さまは、道行く夫婦の巡礼を湖のほとりで逢あった商人あきんどの夫婦とよう似て居ると言われたことも能よう存じて居ります。

老いたる僧 然そうじゃったのう。おれも長い間旅をしているが、あの様に似た人々は見ることがないわ。あの人達が湖のほとりでしおった物語は竹本座の芝居よりは面白かった。あの人達は影のように世の中を這はいめぐっているのだ。

稚き僧 私は今朝けさ方北の橋詰しやがに蹲居しゃがんでいました。其時そのそこを通った武士の夫婦がございました。そして其武士の夫婦は湖のほとりで逢あった商人の夫婦にも、また伊勢の港で見た巡礼の夫婦にも、よう似て居りました。

老いたる僧 うむ。あの人達の影は蜃気楼なごのわたりのように私達に付きまとうて歩いている。そして其人達はお前を見はせなんだか？

稚き僧 あの男の目は美しうございましたけれども、いつで遠いところを見てあるいて居ます。女の方は地面をじつと見つめて歩いて居ます。二人とも地獄から来た人のようにふらふらして歩いています。そして時々街の四辻おそろに立ち止って怖おそろしげに四方を見廻わします。犬に追われる乞

食のように顫ふるえていました。

(急に河の方へ目を投げ、叫ぶ)

おお、あれ、あれ彼処あそこの河岸から船に乗ろうとして居るのが彼の人達ではありませんか？
女の方がまるである人の姉のように、荷物の事に就ついて船頭と話しおうて居ります。女が男の子を引いて飛び乗りました。(二人は暫く黙して其方を眺めている)あれ、あれ、何うしたのでございましょう。女は男の手を引いて船から出ました。船頭は何か罵ののしっています。男はおどおどして四角な白い金を船の中へ投げました。船頭は二人の悪口を言っています。扇を持つ山が、編笠の男となにか、しめし合わせて大刀かたなに手をかけました。扇を持つ男が船頭をうちます。船は対岸に着けられました。二人の男岸に登りました。笠の男は何処どことなく沈んでいますのに扇の男は、見世物小屋に入る子供のようこおどりに小跳こおどりしています。

老いたる僧 (太く嘆息して) 踊子の群は何にも知らずに踊っているわ。あいらは夕餉ゆうげもせずに「子の刻こく」まで踊り通そうというのじゃろう。

稚わき僧 和尚さま、私の袋には米が一杯になりました。何時なんどきに私達は山へ登るのでしよう。はや何時でございましょう？

老いたる僧 お前はもう空腹か！ 酉とりの刻こくにはもう間もなからう。

第二節

老いたる僧 橋の上に人がいるようじゃ、踊子の相手が出来たのじゃな。踊子が連つれを見付けさえ

すれば、いつでも、輪を破つて離れるのじゃ。そうになると、あとの踊が何うなろうとかまいはしないのじゃ。

若き女 離しておくんなあれ！ （姿が見えずに）

稚き僧 何故踊子が連れを求めるのでしょうか？

老いたる僧 連れがあれば二人で踊れるからじゃ。そして歌えるからじゃ。

若き女 帯が解けるな！

稚き僧 ただ二人ばかりで淋さびしくはないのでしょうか？

老いたる僧 「淋しい」というような言葉はあいらにはもうなくなるのじゃ。

若き女 ……（間を置いて）人を馬鹿にしなはんな。妾あたいにはちゃんとした主が……

若き男 ……舟……舟……舟。

（時々鈍い太い声）

若き女 舟は破れても、金はんは門司もじの港へ着いたいうて来やはりました。

若き男 金はんはいい人やな、……

若き女 離しておくんなあれ、お前はんの手はほんまに鉄のようやな。

若き男 ……まあま、そないに言やはらんでいいじゃおへんか！……こないな手でも可愛いいう

て呉れはるいい人もおますなあ……

若き女 ……結句その方がいいがな……あたいは知らぬよって、ちやつちやつと行きなはれ

……

若き男 それではな、あたいがお前の代りに飛脚屋へ行って来るよって、お前はここに待ってい

なはれ、なな、それがいいな。(橋の袂たもとに、柳の蔭に白き頬冠ほおかむりが見える)

若き女 いらんなあいらんなあ、……もう直じき酉の刻や、何うでも離はないておくんなあんなら、腕うでを嚙かみ切るまんね!

若き男 (突然) いたいた!

若き女 (やや乱みだたる姿にて舞台にいで、銀杏いちょうの樹きの前に立ち止る。袖そでを目に当て暫しばらく泣き、ややあつて蹲居ひざまずいて合掌する。稚わき僧のみ首を廻まわして女の挙動を熟視する)

(遠とほく幽かすかにリズムをなして聞える盆唄。櫓ろの音。女は静かに立ちあがり橋と反対の方に立ち去る)

第一の武士の声 (橋の上にて姿は見えずに) 何物じゃ!

若き男 (沈黙)

第一の武士の声 柳の蔭に居るものは誰れじゃ!

若き男 (顫ふるえながら) わたいでおます。土地のもので。

第一の武士の声 土地のものが何故なぜ、さようなところにいるのじゃ?

若き男 柳の枝が欲しいよつて。

第一の武士の声 (やや静かに) 柳の枝を何にするのじゃ?

若き男 女をなぐろうと思しうよつて。尻しり軽がるの嬢かかあを打うたうと思しうよつて。

第一の武士の声 よし、行いけ。

若き男 ありがとうおます。

第二の武士の声 甚じん平へい殿どの、港町へ行くものは大抵この橋を渡るか、其男に聞いて御覽なされい。

なるたけ物々しく問わぬがようございましょう。

第一の武士の声　こらこら、一寸と待って呉れい！

若き男　（驚いたような声）なんでおます。

第一の武士の声　港町へ行く者は皆なこの橋を渡って行くか？

第二の武士の声　私達は港町へ宿をとろうと思つて居るのじゃ。

若き男　さようでおます。皆なこの橋を渡って行きます。

第二の武士の声　よし、よく解つた。有難う。

第一の武士の声　もうよし、静かに行け。

（若き男の草履の音遠くなる）

第二の武士の声　（静に言う）甚平殿、今夜は何故だか、私の手が震えてならない。私は久し

い間大刀を手にしないので、大刀が大変に重くなつたような気がする。

第一の武士の声　市之進殿、私達のこれまでの難難辛苦を思つても御覧なされい。今夜こそ私達

の家族に恥を塗つたものを打つ時ではありませんか、私の腕が鳴っています。

第二の武士の声　私だとしても、貞操を重んずることがこの国の女の最も大きな教、それを破るも

のは敵として見ることは知っています。そんなものは腐のついた蜜柑のように捨ててしまわね

ばならぬということも知っています。然うするのが武士の義務でしょう。（間を置いて）けれど

も蜜柑を捨てるに銀の箸を要せぬではありませんか！　氏素姓も知れぬ小性づれと病身の女を切

捨てるには私の大刀が重過ぎます。

第一の武士の声　もう、お止めなされえ。家族の恥を雪ぎ、悪を懲るのが武士の義務とは思いま

せんか？ さような心持なればこそ妹一人を畜生にしてしまいました。

第二の武士の声 （太く静かに嘆息して） もう、いたし方がありません。私も心を決めて大刀を抜きましょう。

第一の武士の声 無論の事です。

第二の武士の声 然し私は日の暮を待つて討ちたいと思います。私は彼女の顔を見ては大刀が抜けますまい。女の子は彼女によく似ています。私は彼女の顔と女の子の顔と見分けが付かぬようになりました。

第一の武士の声 それでは、其事丈だけはお任せします。私達は静かに港町の方を歩いて居りました。よう、さあ参りましょう。

第二の武士の声 （静に）参りましょう。

（雪駄せつたの音遠くなる）

銀杏の葉は軽く散る。

第三節

稚わかき僧 踊子の群が四五人港町の方から橋の方へ歩いて来るようだ。皆な腰こしに団扇うちわをさして、赤い袖そでを目に当てています。皆な何か話あいながら、お葬式とむらいの列のように。

老いたる僧 （依然として河の方を見ながら）潮が段々上げて来よるわ。あの踊子はその鷗うの飛んだあたりから来たようじゃが、あそこには別な新しい塊かたまりが出来ている、依然よりはもつと大

きうなつたように見えるわ。

稚き僧 真中に入った男は妙な腰付をして歌うではありませんか、まわり周囲の女達は団扇をあげて男を煽あおいでいます。男は一層声を張りあげて歌います。顔を赤くして、頬を膨張ふくらませています。

(間) ほんに和尚さまの仰おつしや有る通り、河水がひどう殖ふえて参りました。「白玉」を売る店の軒行燈の赤い文字が火を燈ともさずに河水に映つて居ります。踊子は「白玉」の屋台を動すので店のお主婦おかみさんが怒っています。(盆唄が時々烈しくなる。二人は黙して眺め入る)

盆唄。(遠く。唄は房州辺の盆唄に類似のもの)

来いといわれて、

其行く夜さは、

足のかろさや、

うれしさや。

○

物を挽ひきやこそ、

お手にも障さわれ、

挽かな見るばか、

ホンニ思うばか。

○

しんとんとと、

眠る眼もいとし、

とりおけおどけ。

(唄の間に男女の言い合う声。笑う声遠く響く。稚き僧のみ時々好奇心に刺激されたように頭を廻して左右を顧る)

踊子の群 (二人ずつ手を組み合い、悲しげに橋の方より舞台へ出る。市松の華美な染模様のある揃そろいの浴衣、タボの長く後に突き出た鬘まげ。メランコリイな姿の内にも何処どこにか放逸な時代が流れている)

第一の踊子 お仙はん何処へ行きやはったか？

第二の踊子 飛脚屋へいて見まほか？

第三の踊子 (舞台の中頃に立ち) ほんまに、それがようおますやろ。お仙はんはあのように気の細ちかい女ひとやよつてに、ひよつとして間違がないとも解りやへんよつてに。

第一の踊子 (第三の踊子を顧みて) 去年は金はんもよう踊りやはったに……わたいは悲しうて、どもならぬな。(袖口を目に当てる)

第四の踊子 それに、わたいは、金ほんとは幼馴染おきななしみやよつて、あの人の癖までよう覚えてまんね。わたいはお仙さんの胸の中を察すると悲しうおますわ。

第三の踊子 して、金はんの船は何処でやられたのでおますやろ？

第二の踊子 門司に近い、日本一の灘なだやと。

第一の踊子 あの南の橋端はしばの飛脚屋には船頭がたんといふことや。その内の一人の男が金はんの友達やと言やはるそうな。

第三の踊子 わたいは金はんが失くなあつたその海が憎うおます。お仙はんはほんまに何

うしていやはるやろ。

第一の踊子 お仙はんの遅いのが気になるなあ。

第三の踊子 それでは急いで行きまよか。

第二の嫡子 さあ。(歩む)

第四の踊子 さあ。(歩む)

(四人は小走りに左手に行く。草履の音遠くなる)

第四節

老いたる僧 山の人はもう夕餉ゆうげの席に就いたであらうのう。お前は ひどう空腹ひもじそんな顔をして
いる。それでもおれ達は月の落ちぬ先に山へ登れると思うよ。

稚き僧 今夜は何となく常の日とは異うように思われます。けれども和尚さま、私は少しも
空腹ひもじとは思いません、見たり聞いたりする事が余り多いので。

老いたる僧 然そうじゃ、幼い時は得てさような事があるものじゃ。そしてお前は恐しく震えてい
るようじゃ、寒くはないか？

稚き僧 寒くは御座いません、僧衣ころもの下に襦袢を着て居りますので、河風もよう通しません。
老いたる僧 それでは、何故さように震えるのじゃ。

稚き僧 何故だか、ただ震えるのでございます。

老いたる僧 うむ、それではこの银杏の陰影かげがお前の身体からだに悪いのじゃ。(間を置き) おれ達は

酉とりの刻こくには山の門を人らねばならぬのだ。あの門の金網の面には赤い布、青い布が沢山に結んであるわ。山の人達はあれに手をつけぬようにせいとお前に言い居ったのう。

稚わき僧 何故あのように申したので御座いませう？

老わいたる僧 人の運命には他人が手を触れぬものじゃ。

稚わき僧 さような意味で言うたので御座いませうか？

老わいたる僧 ただ、其そればかりではない。そのようにするのが、山の人達の生なり業わいなのじゃ。そしてあの布を結ぶ人々はその中に秘密が包まれていると思えばいいのじゃ。

稚わき僧 そしてあの人達は、山門を入らずに山に登るように申しました。

老わいたる僧 おれ達は念仏をもうさぬからじゃ。山の人達は念仏を山の唄と思居るからじゃ。

稚わき僧 踊子の群が船庫の蔭に隠れて行きます。それでも声ばかりは、却かえって高こうなりました。

(二人は黙して河の面に目を投げる。ややあつて稚わき僧のみ左右を見廻わす。唄の声再び遠く響く)

権三 (二十四五歳の青年。憔悴しょうすいしたる神経質な表情、物を怖るるような挙動、鬢びんのほつれが

やや蒼あお白い頬ほに流れている。左の手に編あみ笠がさを持つ。ちぢみ立たて島の着物、大脇おおわき指さし、紫ちりめんの帯、

草鞋わらじがけの旅姿。鋭い響のある音)

私達は日の暮れぬ内に宿をとらなければならぬ。(左手を顧みながら出場) お前はそういう所に立って何をしているのだ。お前の目は糸のきれた人形の目のように、じつと一つと一つとところを見ています。お前の足は宙に吊されているようだ。

おさい (三十六七歳、武士の妻らしき装い、下目かたびら、上着こうりんの墨絵の梅の立木、

ききよう入、帯花りんず、自ちりめんのかかえ帯、べっこうの丸ぐし、紫ぼうし。面長、色白、目細くヒステリイ性の女。力のない歩き方)

(銀杏の幹に手を当てて、男の方を見る) 私も幼い頃但馬の国のある在所の身頼りの家に居た時が御座いました。その時は母方の人達は、男も女も揃手拭に揃の浴衣で踊りました。私にも踊れと申しましたので、私は子供ながらに人々の中に紛れ込んで踊ったことがございました。それが丁度故郷の女の娘と同じ年の十三の折だと思えます。

権三 (自然な態度を以て、女を見ながら) 何うかそのような過ぎ去ったことは言わないでもらいますよう、私は市之進殿の大刀の胸に触れるより、お前の口から洩れて来る追憶の言葉がもっと痛いのだ。

おさい (聞えぬように) あの飛脚屋の前で泣いていた女の顔が、娘によう似て居ります。(首を曲げて河の面を見ながら) ああして楽しげに歌ったりしている娘があるかとおもうと、またああして泣いている娘もある。私も娘の親だと思えば…… (すすり泣く)

権三 (初めは静かに目を閉じ、やがて反抗的に自然に歩む)

おさい 私は斯うして旅をして歩いていても、時々思い出すのが娘の顔です。男の子供達は御祖父さんによく馴染んでいますから少しも心配は致しませんけれども、ただ気懸りは娘の身の上で御座います。

権三 (内海の上を行く夕雲を見て、独語のように) ああ、己れも子供の頃から長い間色々な国を漂泊い歩いた。身体は饑えても心は何時でも楽しかった。行く先き先きの町の燈火は己の為に笑って呉れた。

おさい (ヒステリカルに) 湖の辺で見た夢の中の娘の顔! (手を挙げて、ものを握むような挙動) 「お母さん」とも何とも言わず私の顔をじっと見ていた。おお、あの目、あの目!

権三 (女を慰めるように、傍に寄り添い) 気を沈めて呉れい……気を! お前の目は何処を見ているのだ。私の顔が見えないのか、権三の腕は細いけれども一人の武士には恥じぬだけの力を持つていると言ったではないか! 槍の権三と人に歌われた男……運命の前に頭を下げる位ならば……道德の縄にしばられる位ならば斯んな旅はせぬ筈だ。さ、其手をもって、己れの手を握つて呉れい (女は静に額を挙げて、権三の顔を見る。二人は涙に目をしばたたく)

おさい おお、権三様、私は嬉しう御座います、天にも地にもただ一人の権三様。(ヒステリ性の笑いを洩し、権三の手をとり顔にあてる。権三は却って泣く)

権三 (涙を払い、顔をあげて) ああ、あの歌の声をお聞き。ああいう華やかな世界があるのだ。私達の世界は新たに開けるのだ。「畜生は畜生の世界に楽しんで生きている」とお前が言った。

おお其世界を私達は探しているのじゃないか。……だがその世界は何処にあるのだ?

おさい 「二人の胸の中にある」とあなたは、お仰有ったではありませんか。

権三 だがその胸は破れてはいはしないか、そして私達は怖い運命の前に立っているのではないか?

おさい 私も何となくこの胸が空虚になったように思われてなりません。(胸に手を当てる)
私はあるの女の子を産んだ時にも、恰度このような心持がいたしました。

(黄昏は河とその一体の後景をつつむ)

権三 私達は長い間睡眠を求めて睡眠を得なかつた。(静に橋の方へ進む。)

おさい あ船は大阪へ行ノ、船でしょう。今夜こそは安心して眠れましょう。（少し離れて橋の方へ進む）

（橋を踏む二人の足音次第に遠くなる。極めて唐突に、男の叫ぶ声と女の悲鳴。烈しい鉄と鉄と打ち合う音。走る音、大刀の橋板を切る音、人の倒れる音）

船の中からの声 血だ、血だ、橋の上に人殺があるわ！ 血が雨のように降るわ。（土手の上から見える船の帆、又は帆柱なぞ急に動き出す）

稚き僧 （無意識に橋の方へ歩み）橋の上には、殺された人が倒れています。そして一人の武士が大刀を女の咽喉のどにあてています。そして、も一人の武士は血に染んだ大刀を下げて左の手を目に当てています。

老いたる僧 酉の刻が来たと見えて潮が充ちてしもうた。おれ達の山へ行く時刻が来たのだ。

（老いたる僧、笠と杖つえを手につつ）

稚き僧 （老いたる僧の傍に行き、懇願するように）何うしても私には解りまん。私には解りまん！

老いたる僧 （前と同じ調子）人の結んだ布は解かぬがいいのじや。

船の中よりの声 血だ、血だ……

地から3字上げ（舞台全く暗くなる時幕を下す）

地から2字上げ（一九一〇、九月三日）

地から2字上げ（明治四十三年十月）

定本

『現代日本文學大系 32 秋田雨雀 小川未明 坪田讓治 田村俊子 武林夢想庵』筑摩書房

昭和四十八年一月五日 初版第一刷發行

入力

伊藤時也